

「没価値性」受容の拒否

——戦時下におけるヴェーバー受容の一側面について——

日本大学

竹内弓恵

1 目的

この報告は、戦時体制が強化される時代において Wertfreiheit 概念がいかに受容され、議論され、また時代に合わせて「利用」されていったのかを検討する日本ヴェーバー受容史研究を目的としている。

マックス・ヴェーバーの業績は戦前・戦後を通し、日本において膨大に受容されてきた。

特に Wertfreiheit は、「没価値性」を訳語として当てはめられ、戦前戦後において盛んに議論されてきた。ヴェーバー受容史のなかで Wertfreiheit をあつかった研究では、シュヴェントカー (2013) と三苫 (2007, 2008) の報告に詳しい。それによれば、当時学問世界に圧迫をかけていた国家から、科学の自立性を守るための消極的戦時抵抗として「没価値性」に一縷ののぞみをかけていた研究者達の姿勢が報告されている。しかし、それとは逆に「没価値性」の「拒否」をしてきた研究者については、管見の限りあまり言及されてこなかった。ここに報告者は、一見時流に乗ってヴェーバーの価値判断論を攻撃し、葬っていった研究者たちもまた、ひとつのヴェーバー受容者として検討する余地があると考えた。

2 方法

そこで報告者は、終戦と同時に日本大学の教職を追われた湯村栄一によるヴェーバー受容を中心に、戦時下におかれた研究者達が「没価値性」の「拒否」をすることでいかに独自の学問論の支柱にしていたのかについて検討した。

3 結果

当時発刊されていた学問雑誌や湯村の書籍 (湯村 1942) を調査した結果、他にも多くの学者たちがこの「没価値性」を排撃する姿勢を示していた事が明らかとなった。そこには当時影響力を肥大化させていた国家権力と学問の自立性の間でさまよいながらも、独自の学問を構築しようとする姿勢が見受けられた。特に湯村の研究は、彼の研究姿勢が時流に流されていただけではなく、彼独自の信念が通っていた事は、戦後日本大学の教職を追われた後に執筆した書籍 (湯村 1957) から明らかである。

4 結論

以上の調査を行い、報告者は政治的イデオロギーに屈したのか最後まで反逆したのか、という二元的な観点とは別の観点で分析した。結果として、特に湯村は当時の時代状況の中でどのように日本社会を憂慮し、分析し、そのためにヴェーバーの Wertfreiheit を拒否してきたのが明らかとなった。

文献

シュヴェントカー, ヴォルフガング, 2013 『マックス・ヴェーバーの日本』 みすず書房。

三苫利幸, 2007, 「尾高邦雄のヴェーバー受容をめぐって——「没価値性」から「職業社会学」へ」 『現代思想』 青土社。

——, 2008, 「福武直と Wertfreiheit の意味 : 科学と実践のはざままで (宮澤誠一教授退職記念号)」 『教養研究』 九州国際大学。

湯村栄一, 1942, 『民族的世界観の研究』, 慶応書房。

——, 1957, 『分裂せる日本——騒然たる佐賀文教界の只中にて——』 自由文教人連盟。